

但し、イランの人たち以外の人々、特に古代世界で知識人を自負していたギリシア人は、イランの国のことをペルシスと言ったんですね。これがラテン語でペルシアになるんです。
イランの人たちが「イランだ。イランだ」と言っても、よその国の人は違う名前と呼ぶという、そういったことってよくあることですよ。

私たち日本人は日本のことをニホンと言います。しかし、ジャパンとかヤパンとか、ヘブライ語で日本人はヤパニーです。なんでジャパン・ヤパンになるかという、マルコ・ポーロが『東方見聞録』の中で、「東の方に行ったら黄金ざくざくの島国ジパングがあるぞ！」このジパングに由来する言葉が、それぞれの言語の中で生まれているわけです。よその国の人たちが呼んでいる呼び名と、自らが呼んでいる呼び名が違うってことは ままあることです。

聖書にペルシアと書いてありますが、これは現在のイランです。イランの主要民族はペルシア人です。イランの主要言語はペルシア語。イランの特産品はペルシア絨毯。イランの猫はペルシア猫。イランの目の前に広がる海はペルシア湾。**ペルシア**は現**イラン**です。

2) クシュ。クシュは現スーダンとエチオピア。

エジプトのすぐ下（南側）の緑色に塗った所がスーダン。



古代エジプト人は、自分たちの南側から海に至る地域、スーダンとエチオピアのことをクシュと呼びました。
クシュという王国がエジプトの南にあったからです。

ギリシア人はクシュ王国をエチオピアと呼びました。
エチオピアという言葉はギリシア語。意味は“日に焼けた人々”。

古代アラビア人は、クシュ地方に住んでいる人々・クシュ地方のことをスーダンと呼びました。
古代アラビア語でスーダンは“黒い人”という意味。

エジプト人はクシュと呼び、ギリシア人はエチオピアと呼び、アラビア人はスーダンと呼んだのですが、これはみな同じエリア・同じ人々のことを意味するんですね。
昔はクシュ王国1つだったのが、その場所に現在2つの国（エチオピアとスーダン）があるわけです。
クシュは現**エチオピアとスーダン**です。

3) プテ。プテはリビア。

スーダンの北西、エジプトの西側にある地中海に面している国がリビアです。
なぜリビアがプテなのかというと、2つ根拠があると思うんです。



◆今から2000年ほど前の1世紀、ユダヤ人歴史家ヨセフスが『ユダヤ古代誌』を書きました。これは聖書をつっ込んで勉強する人、必携・必読・必須の本です。
昔、山本書店から1冊7000円くらいしたんですよ。今ね、1000円以下。
ちくま学芸文庫から文庫本で出てます。いや〜、これはもう僕は必ず目を通す本です。

この第1巻の63ページにこんな文章があるんです。「プテはリビアを創建し、自分の名にちなんで、その土地に住む者をプテ人と呼んだ。」

1世紀のユダヤ人歴史家の認識では**プテ**は**リビア**だ、ということがこの本によって分かるんです。

◆今から 2200 年ほど前に、70 人訳聖書という聖書が翻訳されました。

旧約聖書は基本ヘブライ語。一部アラム語ですが、大体がヘブライ語で書かれています。

ところが、今から 2200 年~2300 年前のユダヤ人たちの中に、ユダヤ人だけ自分たちのご先祖の言葉の読み書きが出来ない人たちがたくさん出て来たんですね。彼らは当時の国際共通言語のギリシア語は器用に使いこなしていました。そこで、彼らに聖書を読ませ、理解できるようにするために、ヘブライ語で書かれている旧約聖書をギリシア語に翻訳したんです。これを 70 人訳聖書と言います。

旧約聖書の中に**プテ**という言葉は 8 回出て来ます。ギリシア語に翻訳された旧約聖書（70 人訳聖書）では、8 回のプテが全部“**リビア**”になってるんです。BC2 世紀くらいのユダヤ人の民族理解・世界理解は**プテ = リビア**なんですね。ですから、地中海に面しているアフリカの、カダフィ大統領がいつとき支配していたあのリビアと考えて良いのではないのでしょうか。

4) **ゴメル**。ドイツ・或いはドイツより東側のドイツ語文化圏の人たち。

タルムードやミドラッシュでは、ゴメルのことをゲルマイニアと呼んでいるそうです。

フルクテンバウムさんがそのように仰ってました。ゲルマイニアはヘブライ語。ドイツの意味です。

また、ノアの箱舟で有名なノアには 3 人の息子（セム、ハム、ヤフェテ）がいましたね。

ヤフェテの息子がゴメル。ゴメルには 3 人の息子がいて、長男がアシュケナズ。

現代ヘブライ語では、ドイツ系・東欧系ユダヤ人のことをアシュケナズ/アシュケナジーと言います。

因みに、アシュケナズ/アシュケナジーはフランス語ではアルマーニ。非常に恰幅が良い人たちですね。

ゴメル。ゴメルから出たアシュケナズ。これが、現代ヘブライ語ではドイツ系ユダヤ人/ドイツを連想させていると考えたら、“**ドイツ・或いはドイツより東側のドイツ語文化圏の人たち**”でまず間違いないと思います。

5) **ベテ・トガルマ**。ベテ・トガルマは現トルコ。

ベテ・トガルマは 2 つの言葉に分けることが出来ます。ベテは家。トガルマは民族の名前。

ベテ・トガルマはトガルマの家。これは民族名というよりも地名です。トガルマが生息していた地域というような意味なんですね。では、トガルマとはいったい誰なのか。



アナトリア半島。黒海と地中海に挟まれた 突き出ている半島です。南の方にトロス山脈が 2 つ走っていて、西のトロス山脈・東のアンティ・トラス山脈。

アンティ・トラス山脈の上方に行くともユーフラテス川の源流があって、そこから支流が分かれてトクマ川が流れている。そのトクマ川のほとりに、トルコ語でグールンという町があります。

トルコ語のグールンはヒッタイト語でテガラム。ヒッタイトは鉄器をもたらしたヒッタイト人です。

ヒッタイト人はアナトリア半島で発祥したんですよ。ヒッタイト語のテガラムはトガルマから来た、と言われてます。テガラム/グールンがある場所は、アナトリア半島の中央部からちょっと東、ユーフラテス川の源流一帯。つまり、トガルマはアナトリア半島中心部と考えていいでしょう。

現在 アナトリア半島全体を支配しているのはトルコ共和国です。

ですから、**ベテ・トガルマ**は現**トルコ**で間違いないでしょう。

ロシアと同盟を組んでイスラエルに攻め込んで来る国は、**イラン**を筆頭に**トルコ・スーダン・エチオピア・リビア・ドイツ/東欧圏・トルコ**。

彼らがやがてロシアの軍門に入り、ロシアと同盟を組む形で大軍団を率いて、再建されたイスラエルに攻め込んで来る。これが**エゼキエル戦争**の預言です。

ところで歴史的に見ると、この組み合わせは不可能に近いのです。特にイランとトルコにとって、ロシアは“恐ろしあ”なんですよ。

イランにとって自分たちの北の隣国ロシアは膨張主義。南下政策でいつでも南に下りて来ようとしているのです。トルコなんてね、この500年間にロシアと14回も戦争してるんですよ。それで12回ボコボコにやられて、その度に領土が削られて小さくなって行ったんですね。

そんな宿命のライバルで、歴史的経緯で仲良しの時代が1回もないトルコやイラン。

これがどうして同盟を結ぶんですか？ そんなこと、あり得ますか？

今までの歴史的経緯を考えたらあり得ないことなんですけど、この写真をご覧ください。



向かって左はイランの前大統領ロウハニ。

真ん中がロシアのプーチン大統領。

右側がトルコのエルドアン大統領。

この3人が2017年11月22日、ロシアのソチで勝利者会談という会談を行いました。

アラブの春で内戦に突っ込んで行ったシリアの内戦を事実上終わらせて、1度は風前の灯火だったあのアサド政権の息を吹き返させるために協力した当事者たち。ロシア・イラン・トルコ。

第二次世界大戦末期にヤルタ会談があったじゃないですか。アメリカ・イギリス・ソ連が戦後処理を話し合ったように、グジャグジャになったシリアをどう戦後処理して、中東のこれからを運営して行くか。ロシアとイランとトルコが話し合っ、現在も続いているんですね。

普通ならアメリカが横やりを入れますが、共和党の大統領であろうが民主党の大統領であろうが、アメリカはこれから中東から撤退して行くという方向を決めてるんです。

そして、中国との対決に総力を注ぐことにハンドルを切っているんですね。

だから、ロシア・イラン・トルコの3つの協力関係の中で中東が動いて行く。

これは、エゼキエル戦争の実現に結びつくような歴史的イベントが、今進んでいるということなんですね。

私たちはすごい時代に生かされていると思います。

さて次回は、エゼキエル戦争の結末についてご紹介したいと思います。

よろしければ、チャンネル登録をお願いします。

ではまたこのシリーズでお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気でいらしてください。

さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。